

学生海外調査研究	
トルコの都市空間にみる世俗主義とイスラーム主義の関係性：フランスとの比較を通じて	
氏名	佐藤 香寿実
	ジェンダー学際研究専攻
期間	2015年10月28日～ 2015年11月7日
場所	トルコ（イスタンブール、アンカラ）
施設	モスク、教育機関

内容報告

1. 研究背景

1.1 フランスにおける世俗主義とイスラーム

報告者はこれまでフランスを対象地域とし、政教分離原則ライシテと、イミグレーションとともに移植されたイスラームとの葛藤に関心を抱いてきた。フランスにおけるムスリム移民の統合は、三十年以上に渡って重要な政治課題とされてきたが、その「統合」をめぐる言説の中心に共和国原則ライシテの存在がある。この原則は、王政と結びついたカトリックを公的領域から排除することで信教の自由を保障し、共和制を確立していくための歴史的な闘争とともに発展してきた。1905年制定の「教会と国家の分離に関する法」によって立法化され、憲法原則にもなっている。歴史的に意味が変容してきた多義的な概念であり、かつ地域的に適用のされ方が異なる曖昧な概念であることが指摘される（ボベロ 小泉 1998 など）。それにも拘わらず、近年のライシテ解釈は厳格化の傾向にある。スカーフ論争¹の例からも見てとれるように、ナショナル・アイデンティティとしてのライシテを「侵犯するもの」としてイスラームはしばしば表象され、攻撃されている。

このような固定的なライシテ観を問い直すために、筆者はライシテの地域的差異に注目し、特に、フランス北東部のアルザス地方に関する研究を行っている。修士論文では、モスク建設という具体的な事例を通じて、アルザスの地域特性を反映したイスラーム実践の在り方に迫った。しかし、他地域や諸外国との制度との比較の視点に乏しく、地域的差異に対する配慮が不十分であった。そこで、博士課程における研究では、他地域や諸外国における制度との相違を明らかにしつつ、アルザス地域におけるイスラームの制度化の可能性と課題を、日常の生活空間を通じて明らかにしたいと考えている。

1.2 トルコにおける世俗主義とイスラーム

上記で述べた比較の視点を取り入れるために、本調査ではトルコを訪問した。トルコは、1923年に共和制を樹立して以来、世俗的なムスリム国家として存在感を発揮してきた。初代大統領ムスタファ・ケマル（アタテュルク）らは、近代国家の確立のため、イスラーム法の統治から世俗法による統治への切り替えを行う。前時代との断絶を強調するために行われた、西暦の採用、飲酒の合法化、イマーム教育とイスラーム神学校の廃止、ローマ文字の採用、アザーンのトルコ語化などの一連の改革を支えたのは、フランスのライシテを手本として生み出されたライクリッキと呼ばれる世俗主義原則であった。ライクリッキとは、アタテュルクの共和国建国理念とされる「アタテュルク主義」の中心的要素である「六本の矢」²のうちの一原則として位置づけられたもので、1982年憲法で詳細に規定されている。新井（2013）によれば、ライクリッキの原理に基づき、宗教は公的場面から極力排除される一方、イスラームは国家によって管理する体制が取られた。具体的には、モスクにおけるイマームらの人事とモスクでの説教内容の統制は宗務庁の管轄下に、モスクやワクフ財産の管理はワクフ総務局の管轄下に、それぞれ置かれた。この新しい共和国では、イスラームは「後進的」なものとして退けられ、代わりにトルコ・ナショナリズムが強調されたのである（新井 2013 : 96）。

1945年の複数政党制の導入以降は、世俗化改革に一定の修正が求められるようになり、モスク建設の増加に伴い宗務庁も拡大された。1970年には、国民秩序党の名を冠したイスラーム政党が結成され、世俗主義に反するとして何度も非合法化されながらも、国民救済党、福祉党、美德党へと形を変えながら存続してきた。美德党が非合法化されたのちに旗揚げした公正発展党（AKP）は、2002年に単独

与党となり、以来第一党の地位を保持している。大学におけるスカーフ着用禁止³などの厳しい世俗化が進められてきたトルコだが、近年、世俗化は緩和の傾向にあり、特に AKP が政権を掌握して以降、世俗主義の「周縁化」が見られる（澤江 2005）。

トルコにおける世俗主義に関する邦語の研究では、その制度化の歴史や近年の政治情勢に絡めた議論が積極的になされている（澤江 2005、粕谷編 2011、新井 2013）。また、西洋におけるムスリム移民をめぐる問題と絡めた議論も若干ではあるがなされている（内藤 1996 など）。これらの研究成果をもとにフランスとの比較を行うことはある程度は可能であるが、日常の生活空間に対する影響という観点で比較を行うには情報に乏しく、自ら足を運んで情報を得ることが不可欠である。

2. 研究目的

本調査は、報告者の博士論文執筆のための一連の調査のひとつとして位置づけられる。比較対象としてトルコを選んだのは、フランスに似た世俗主義原則を導入していることと、ムスリムが多くイスラーム主義の興隆が見られることによる。また、筆者の主要研究地域であるアルザス地方におけるムスリム移民の最大の送り出し国がトルコであることも、理由の一つである。より深い分析のためには、移民の出身国における現状に対する見識が不可欠である。

本調査の目的は、まず、トルコにおけるライクリッキとイスラーム主義の関係性を知ることで、アルザスにおけるイスラーム運動のバックグラウンドを理解すること、そして、フランスの事例とトルコの事例を比較することで世俗主義の在り方に対して新しい知見を得ることである。特に、モスクや学校などの具体的な生活空間において、世俗主義あるいはイスラーム主義の影響がどのように現われているのかフィールドワークをもとに考察する。報告者にとって、フランス以外の国家にも目を配り、世俗主義とイスラームの関係をより広い視点で捉える、最初の足掛かりとなるだろう。また、「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」という当プログラムの目的に則り、現地の研究者との交流を図る。

3. 調査の成果

3.1 調査概要

本調査は、2015年10月28日～11月1日にイズミールにおいて、また、2015年11月1日～11月6日にイスタンブールにおいて行った。この二都市を選んだ理由は、イズミールが共和人民党（CHP）の支持者が多く世俗色の強い地域であるという特色を持っていること⁴と、イスタンブールがトルコの経済的・文化的中心地であり、歴史的遺産が豊富な都市であることによる。イズミールでは、調査協力者 C 氏家庭におけるホームステイを通じトルコ市民の生活を参与観察しつつ、10月29日共和国記念日における実態調査、C 氏へのインタビュー、博物館やモスクへの訪問を行った。イスタンブールでは主に、現地研究者に対する聴き取りと、モスクや博物館への訪問を行った。

3.2 イズミールでの調査

3.2.1 共和国記念日における参与観察

10月29日は共和国記念日であり、トルコ各地で盛大な祝祭が開かれる。報告者が滞在していたイズミールでは、マンションや商店、高層ビルなど、いたるところにトルコ国旗やアタテュルクの顔写真入りの旗が掲げられ、街全体が赤色に染まっていた。報告者がホームステイでお世話になった C 氏は高校教師であり、C 氏の勤務する市内の高校では毎年この日を祝うイベントが開催される。報告者は C 氏に同行し、イベントの様子を見学することができた。イベントでは生徒によるアタテュルクの生涯に関する歌と朗読の出し物がなされたが、アタテュルクと共和国の歴史を称賛する内容となっていた。その後、市内の共和国広場で行われた祝祭イベントに参加した。アタテュルクの像が設置されているこの広場のまわりは、国旗を手にした市民で埋め尽くされ、催しを見るのに大勢がひしめきあっていた。軍人や政治家たちの自動車を使ったパレード、スピーチ、少年少女による伝統的踊りの披露、軍の音楽隊による演奏、市内の学校関係者による行進などが行われた。

3.2.2 モスクや博物館への訪問

イズミールは他都市に比べてモスクが少ないが、三つのモスクを訪問した。また、イズミール市内のアタテュルク博物館にも訪問し、アタテュルクの生涯、独立戦争の流れ、アタテュルクとイズミールとの繋がりについて情報収集を行った。

3.2.3 現地住民へのインタビュー

報告者のホームステイ受け入れを行った 30 代のトルコ人男性 C 氏に対し、英語を用いた 1 時間程度の半構造化インタビューを行った。イズミール生まれイズミール在住で、世俗主義政党である CHP

の支持者であり、ムスリムであるが1日5回の礼拝は行わないなど、あまり実践的な信者とはいえない。C氏にとって、ライクリッキはアタテュルクが打ち立てた最も重要な原則のひとつであり、宗教とは「神と個人との間にあるのであって、国家が関与すべきことではない」。彼に対し、近年の政治情勢の変化や公共空間の捉え方に対する見解、さらに日常生活における具体的なライクリッキの影響を明らかにするため、学校における宗教教育、墓地の状況、モスク建設などについて尋ねた。

3.3 イスタンブールでの調査

3.3.1 現地研究者との面談

イスタンブール・シェヒール大学において、二人の研究者から話を伺った。一人は、宗教と政治、トルコの近代化、グローバリゼーションなど幅広い専門領域を持つ歴史社会学者ヌルラー・アーディッチ (Nurullah Ardiç) 氏であり、トルコの世俗主義に関する研究も行っている人物である。もう一人は宗教と国家の関係を専門とし、主にアメリカとトルコの比較研究を行ってきたズベイル・ニサンシ (Zubeyir Nisanci) 氏である。どちらも1時間半程度のインタビューを行った。

アーディッチ氏からは、トルコの世俗主義の特徴や、トルコの近年の政治情勢について話を伺った。アーディッチ氏によれば、トルコの世俗主義はフランスのライシテ・モデルを採用しているのではあるが、宗務庁などを通して政府が宗教を管理している点でフランスとは異なり、むしろロシアの政教関係との類似が見られるという。例えば、トルコではイマームが政府によって指名されているばかりか、金曜礼拝時の説教では政府が作成した文章がイマームによって読まれるそうだ。しかし、このトップダウン式の軍部による厳格な世俗主義の推進は、多くの信仰深い市民には受け入れられず、制度の民主化が進めば進むほど、イスラーム政党が躍進するというジレンマが生じてきた。近年では、政権与党 AKP により世俗主義は柔軟化されており、例えば2013年にはそれまで禁止されてきた公務員のスカーフ着用が認められるなど、特に個人の宗教性の表出に関して緩和の傾向が見られる。また、1970～90年代にかけて報告されてきた、ヨーロッパにおけるイスラーム運動ミッリー・ギョルシュと政府管轄の宗務庁トルコ・イスラーム連合 (DİTİB) の二勢力間の対立は、近年では解消されていることが分かった。なぜなら、ヨーロッパにおけるミッリー・ギョルシュ運動においては AKP 支持者が多く、同じく AKP 政権に管理される DİTİB とは、現在は方針を同じくしているからである。

また、アメリカの事例に詳しいニサンシ氏によれば、フランスとトルコの世俗主義はどちらも、宗教を周縁化し、私的空間に押し込める性質を持っているのに対し、アメリカの世俗主義はより寛容で開かれているという。また、フランスとトルコで比較した場合、トルコの方がより権威主義的・トップダウン形式であるという見解が示された。他にもニサンシ氏からは、関連分野の英語文献を多く紹介してもらった。同時に、歴史と照らし合わせながら現在を考える視点の重要性や、比較研究のデータの取得手法など、研究方法に関する有益なアドバイスを受けた。

3.3.2 モスクや博物館への訪問・聴き取り

千を超えるモスクがあると言われるイスタンブールでは、中心市街地のいたるところにモスクが見られ、それらが街並みに溶け込んで街の景観を形成している。本調査では、スルタン・アフメット・モスク、スレイマニエ・モスク、エユップ・スルタン・モスク、イェニ・モスク、ルステム・パシャ・モスク、ミマール・シナン・モスク、クルチュ・アリ・パシャ・モスク、フィルズアー・モスク、ファーティフ・モスク、ギョル・モスクなど、市内の計10か所のモスクとハギア・ソフィア大聖堂を訪問した。ブルーモスクと呼ばれるスルタン・アフメット・モスクでは、観光客を意識して英語で説教が行われており、イマームに対し英語で簡単なインタビューを行うことができた。また、イスタンブールで特徴的であったのは、スレイマニエ・モスクやルステム・パシャ・モスクなど、天才建築家ミマール・シナン作のモスクが多く見られたことである。イズニック・タイルがふんだんに使われたり、高いミナレットが何本も付けられたりと、当時の権力者の権威を表す豪華なつくりとなっている。この建築家の名を冠したミマール・シナン・モスクは、2012年に政府によってアジアサイドに建設された新しいモスクであり、「AKPの権力を象徴」している⁵。近年のイスラーム主義の高揚を印象付ける建築物である。さらに、ファーティフ地区に位置するギョル・モスクや、ハギア・ソフィア大聖堂など、キリスト教会だったものをオスマン帝国時代にモスクへと作り替えた例が散見された。

3.4 その他

上記に加え、全体の滞在中を通じて、文献や資料の収集を行い、現地の書籍や新聞、モスクのパンフレットなどを集めた。滞在中の11月1日に総選挙が行われたこともあり、特に政治情勢に関する情報が多く手に入った。また、惜しくも面会が叶わなかったイズミールのドクズ・エイリユル大学の講師 Şafak Evran Topuzkanamış 氏より、メールを通じてライクリッキに関する資料・情報を得た。

4. 考察

トルコにおける世俗主義とイスラーム主義の関係性は、ダイナミックな変化の渦中にあり、近年は軍部主導の「行き過ぎた」世俗化に対する反発として、イスラーム政党への支持が伸びている。フランスにおけるトルコ系イスラーム団体間の関係性も、このようなトルコ本国の政治情勢に大きく左右されることが分かった。

また、本調査の結果から、フランスとの相違点として以下のことが明らかになった。まず、トルコとフランスでは、それぞれの世俗主義の性質と機能に違いがある。どちらにおいても世俗主義は憲法原則である点は同じだが、トルコでは、世俗主義は西洋から持ち込まれ、上から推進されたものである。何よりもまずアタテュルク主義と結びついており、アタテュルク主義の「擁護者」である軍部（岩坂 2011）とも結びついている。共和国記念日の熱狂から、多くのトルコ市民がアタテュルクに深い敬愛を抱いていることは感じ取れたものの、「上から」押し付けられたライクリッキは、ナショナリズムを高揚させる装置とはなり難い。これに対し、フランスのライシテは、一般市民が蜂起したフランス革命に、その萌芽が見られる。王政と結びついた教権主義に対抗する共和主義のイデオロギーであったライシテは、市民にとって強固なナショナル・アイデンティティとなっている。また、アーディッチ氏が指摘するように、トルコのライクリッキは、国家が宗教を管理するという意味合いが大きい。一方、フランスでは、カトリック教会の国家への影響力を排除するためにライシテが作り上げられてきた側面があり、公共空間における宗教性の表出が厳しく禁止される。しかし現在、教会組織を持たないイスラームに直面し、国内の様々なイスラーム団体を代表する機関を政府主導で設立するなど、宗教を管理するライシテへのシフトが見られる（伊達 2015）。トルコでの宗教管理体制は、フランスの今後にとって有益なヒントを与えてくれるかもしれない。

イスラームの国内における立場にも大きな違いがある。何と云っても、ムスリム人口の比率と、イスラームが自らの地位を築いてきた歴史の長さには差がある。トルコでは、国民の圧倒的多数がムスリムであり、マジョリティを占める。イスラームが信仰されてきた歴史が街の景観にも刻み込まれており、例えば、フランスでは聞くことのできないアザーンが、トルコでは毎日あらゆるところで聞こえる。このような国では、スカーフ禁止などの敬虔なムスリムを攻撃するような政策は、大きな抵抗を受けることになる。一方、フランスのムスリム人口は、全体の1割程度にしか満たず、宗教的にはマイノリティである。さらに、ムスリムの大多数が移民あるいは移民出自であるという事実によって、その立場はより弱いものとなっている。イスラームは移民問題と結びつけられ、植民地時代の負の遺産を引き継ぐようなムスリムへの差別も珍しくない。日常の宗教実践を行ううえでも、様々な問題が生じている。イスラームは新規参入した宗教であり、そもそも、フランスでライシテが成立した当時はイスラームのことはほとんど考慮されていなかった⁶。現在新しく根を下ろそうとするイスラームの宗教実践は、昔から存在してきた宗教よりも、いっそう厳しい条件に置かれてしまう。例えば、宗教墓地の新規建設が禁止されているため、近年、ムスリムの墓地不足が深刻化している。しかしオスマン時代からのイスラーム的遺産を有すトルコでは、礼拝所や墓地の不足は問題にならないのである。

5. 今後の課題

本調査による成果として、今後筆者が博士論文の問題設定を行うために不可欠な、比較の視点を得ることができた。フランス、トルコ双方とも、国内において大きな地域差があるうえ、辿ってきた歴史が異なるために、筆者の短い滞在期間で得たデータのみで単純に二国の状況を比べることはできないが、上述のようにいくつかの大きな相違点が明らかになった。この相違点に目を向けることで、フランスのライシテをめぐる言説にしばしば内包される普遍主義を問い直すことができるだろう。

ただし、トルコ国内の政情不安のおそれ⁷により直前に滞在日程を変更したために、アポイントメントの取り直しや通訳の手配が間に合わず、予定されていた通りの十分な調査が出来たとは言い難い。日常生活空間に根差した本格的な分析を行うためには、本調査で得られた情報を整理したうえで、比較対象とする個別事例を選定し、追加調査を行うことが必要となるだろう。

本調査で得られた成果の一部は、報告者の博士論文において公表するほか、人文地理学会における学会発表などに繋げる予定である。今後は、本調査で得られた成果を足掛かりとして、他の国々における政教関係にも目を配り、他国との比較を通じてフランスの状況を具体的に論じていきたい。

6. 謝辞

本調査を行うにあたり、平成 27 年度「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムのご支援をいただいたことに深謝いたします。また、インタビュー等を通じて貴重な情報をくださった協力者の皆様、筆者を家庭に受け入れてくださった C 氏、市街地におけるガイドを引き受けてくださった本学博士課程の小川杏子氏に心から感謝申し上げます。

注

1. 1989年の「スカーフ事件」を契機として、公立学校におけるムスリムのスカーフ着用のは非をめぐるフランス全土を二分するような大論争が巻き起こった。この論争の結果として、2004年に宗教シンボル禁止法が成立した。
2. 六本の矢とは、共和主義、国民主義、人民主義、国家主義、改革主義、世俗主義のことである（岩坂 2011）。
3. 大学におけるスカーフ着用の禁止は、AKP 政権下の 2008 年に憲法改正とともに廃止された。
4. 2015 年 11 月 1 日の総選挙では、CHP の得票率は全体の 25.43%にとどまったのに対し、イズミールでは 44.32%もの得票率を出している。
5. Dünya ウェブサイト記事より
<http://www.dunya.com/mobi/dunya-ihb/biggest-mosque-on-asian-side-of-istanbul-symbolizes-power-of-akp-176681h.htm>（最終閲覧日：2015 年 11 月 2 日）
6. 例えば、当時フランスの植民地であり、住民の大多数がムスリムであったアルジェリアには、1905 年の政教分離法は適用されなかった。Baubérot(2006:988)によれば、ライシテが成立した第三共和政期には、イスラームはカトリックに比べてより啓蒙的でより寛容だと考えられていた。
7. 2015 年 10 月 10 日、アンカラで行われていた平和集会において 80 名超の死者を出す爆破事件が発生したことから、総選挙が予定されていた 11 月 1 日に大都市イスタンブールに滞在するのは危険だと判断した。

参考文献

- 新井政美 (2013) 『イスラームと近代化：共和国トルコの苦闘』講談社選書メチエ
- 岩坂将充 (2011) 「トルコにおける軍の『公定アタテュルク主義』の模索と世俗主義」柏谷元編『トルコ共和国とライクリキ』上智大学イスラーム地域研究機構 3-31.
- 柏谷元編 (2011) 『トルコ共和国とライクリキ』上智大学イスラーム地域研究機構
- 小泉洋一 1998. 『政教分離と宗教的自由—フランスのライシテ』法律文化社
- 澤江史子 (2005) 『現代トルコの民主政治とイスラーム』ナカニシヤ出版
- 伊達聖伸 (2015) 「フランスにおけるイスラームの制度化と表象の限界—宗教を管理するライシテの論理」『Odysseus : 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』(別冊 2) 35-57.
- 内藤正典 1996. 『アッラーのヨーロッパ 移民とイスラーム復興』東京大学出版会
- ボベロ, J. 著, 三浦信孝・伊達聖伸訳 2009. 『フランスにおける脱宗教性の歴史』白水社
- Baubérot, J. 2006. *Laïcité française et islam, Histoire de l'islam et des musulmans en France du Moyen Age à nos jours*. ALBIN MICHEL.

さとう かずみ／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科研究科

指導教員によるコメント

佐藤香寿実さんは、学部の卒業論文時代から、一貫してフランスのライシテ（政教分離原則）と、ムスリム移民のかかわりを論じてきた。修士論文では、自らが交換留学したアルザス地方、ストラスブールをフィールドに、そこでは厳格なライシテが適用されず、モスクの建設に公的資金が提供されていることに注目し、その背景に、大モスクが、フランス国家だけでなく、EU、アルザス、ストラスブールという異なるスケールの中の相互作用の存在があることを考察した。今回の調査は、その延長線上にあるものである。フランスのムスリム移民は、北アフリカ（マグレブ 3 国）出身者が多いが、アルザスはドイツと接し、ドイツ同様トルコからの移民が多い。その出身国のトルコの文脈を調査することが第一の目的であった。さらにトルコは、ムスリムが多数派であるが、一方で世俗主義が国是となっている点で、フランスとの共通点を持つ。この調査では、移民輩出国としてのトルコの社会的文脈を体感できたことに加え、聞き取り調査を通じて、世俗主義をめぐる両国の相違点を明らかにすることができたことで、今後の博士論文の構築につながる、大きな成果が上がったと評価できる。（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科・熊谷圭知）

The Relation between Secularism and Islamism in Turkish Urban Spaces: A comparative study on Turkey and France

Kazumi SATO

The purpose of this study is to examine the relation between secularism and Islamism which emerges in the Turkish context, especially which can be seen in urban spaces, and to compare it to that of France. This survey was conducted in the period from October 28th to November 7th 2015 in Izmir and Istanbul, mainly by visiting several mosques and educational institutions. As a result of the fieldworks and the interviews, it was found that there were several differences between Turkish case and French case in the nature and function of the principle of secularism, and in the status and history of Islam in domestic context.